

五  
六

三



序

今を世か 首をこれ世談と絶て  
 一志かを勸善懲惡乃人をみち  
 にくれ卒道か終を也爰に濃品  
 大垣乃産辻堂氏兆風子心より此日  
 此草子紙著し傳ふ祠姜言葉  
 鮮なれを握斂し其長乃る  
 此れなり且食を忘る此南あや  
 何をさあやこれ同志にゆきゆ  
 とわやいぬまは風の拳をこれ  
 玉をこれ能はまきくもかきとあ  
 何なりしる也

多田寸文礼

卷一

〇序

甲申孟春

城南

拳堂  






多西寸卷終卷才一

目錄

天滿宮通夜物語

寧有傳蒙清久親吉利

伴御前靈云祿

仁王冠者之事

仁王冠者之事

伴御前靈云祿

寧有傳蒙清久親吉利

天滿宮通夜物語

目錄

多西寸卷終卷才一





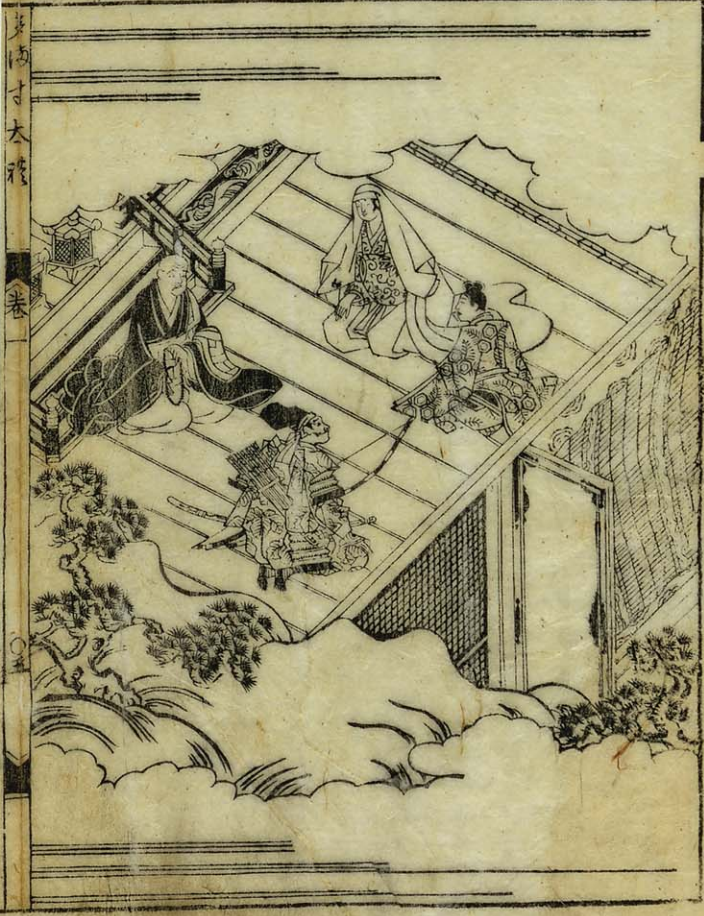






[illegible]







をのづゝ秋よ心をよせ学よ人も多かふむけつ福をらと  
 自然と得心してややまりとかなふしとあれた内い某が  
 あさまけいゝとををぬも又い西舟をほむぬも遂にい  
 うしつも止むくともかたはいけりあふ中あを  
 女性すみ出ふしに有難きけり人れづゝい抱瘡に  
 計あきけり人し成て抱瘡といふのまぢよりうず  
 のれぬとみえふりそがまけりさい空國はは羅せ激運  
 乃輩多くとも身と棄けり抱瘡なりてよんくしとる  
 顔とまぢい火を改て精をもとるやもあききりまた  
 い誠は作てて父母さんぐくりあつまりはるくれたま  
 半のひらゝゝ遠いのふりうて科をさ此人をねむる  
 看病とるゝととも限りのを食むて終の道ゆくゆひく











道に就いて實利ありやをのぞくが理をささぐすて軍  
神は罪を深せ大をゆくりむ七曜よりくれば理を  
つきて悩む故にもろく人をしてそのけりうが神の  
威を極むる非なるをて下人もよくまきそと主  
人を是れとて悩むとて富強をむきなり其子と養ふ  
財物あまた軍士の田里をまき軍兵もむくむゆゑに  
を二途に寛め運を致し申は分り實かに人より習ひ  
てそのけりうをわづらひく人小強くも物をけりうを  
よきなりとて子孫よりて次所給いふ海に人をも内軍  
もその剛神と起るはに我れ難もをのぼる難くして  
久く天下泰平をまかすをいひたりと面々に結り  
て我も其中よりわくを極め再びわがきまにに  
失りよきなりはとて是をくまき天神の示り  
に信ん所よめいどてそのいふもわづらひてむるに陣中  
よゆりゆきこの功名を完りし孫盤榮あきなり

奉旨僧蒙法親親利金豆

中に九節軍府の僧とてはてて射むよりなり。孫盤榮に孫盤榮  
孫盤榮目に群衆あきなりはてての市僧多くありこれを聴す  
志より其三人の僧とて席をうきく聴衆の教は必ずて月日  
を送りより中や一人は貧僧孫盤榮に從て自泰の間に  
孫盤榮と頭陀志よりけり有りもかきけりなり宿宅に夢と  
いふとんと梨下わたりけりなりはてて因宿れ僧と貧しむる  
いふ人きよきなりむすなり梨下よりなりはてて  
なり孫盤榮と親親佛もわづらひなりはてて



は際かく田つりては米をねくもやと云いしを、  
とろろ或夜乃に夢想も中宝あり。五府なる多と上通  
り山ゆひぬのありにや米をわんゆひ計さひやとを  
思へるは、  
て儚をみかり現よとあり感涙をかり、  
賜りも思乃方（ねりて）  
うと云ふも文よふなり、  
吐く屋ろく雲にちちのやとく自雲をほろふ龍に  
ををねく、  
山乃地まよとく、  
ていぐ、  
不親世育れ、  
多ゆす本抄

とく山ありく入まわくす、  
林あり雪きてわく、  
とくわく、  
ちをとり、  
中をゆりて、  
肉（へ）  
刈（き）  
おんとす、  
よこ（へ）  
ろろ、  
不若ふり、



きうろしきにむさうきてしるきも早の山伏ごとく家慢  
乃翅さ情場乃情ゆり威を牛にるは乃所り鳥獸乃家ゆり  
ごとせいはつすうらむをさう人ありてまゆみさくいとり  
もも情ゆり乃ぬ系かとりき中をゆりまふれとて女を  
いひて四うんに金より振るるももりる例を人  
あはれとむいぬふ中ふやとりわてむ情吐してゆり情  
籍をゆりあふまをのくゆりなり五更月落く一点乃焼  
のり車己よゆんとすうねて物とも又ふくゆりてきて  
虚をとりあふまよりうね内又たををり出は  
よにせむい作うりうも情は飯料の中ぬん易か  
但け幼なる尾は乃ふまかきしき武士のしきかつく  
ひとめを具してふまかきしきと作るる則











て何事と不足ありて世間のこととをねとめい後よりい  
尾易と大なる望とを建<sup>けん</sup>立<sup>た</sup>てんとするゆゑに大<sup>だい</sup>豊<sup>ほう</sup>應<sup>おう</sup>護<sup>ご</sup>法<sup>ぽう</sup>王<sup>わう</sup>  
方便ありとてかゝる心算なり

佛印靈會錄

文永の御丹波より侵入。彼多野下野司安室と云ふものあり奉教  
 の役はあらず。勝子ある元通と云ふ一其業及びひあゝ且々  
 都一見れぬの母りくもに具足して在るす。又思ふ天  
 性、非難なく書畫を造し武備を志わたり馬は御領  
 ておねなることさへまじか。流家のみやむをのく  
 師者のむつびを句日に抄與へてをなれ山崎氏賞せ  
 るといふなり。父前司いひく今秋亦生利のめよに  
 うらうらありめのかぶさい大さき人々ゆきさるとい  
 て幽憤をぬき、戦場をかりぬけ煉文女は伯耆王をちん  
 とてかににせむいく國道をとも共々具さんと毎日の  
 あそびなきく心もち久しく遠き国はゆるび又郎を  
 娘とせんをもぬく。暫ゆり終らんまで唯たは憂ふ  
 と歎く要玉を同けて家を都の邊へ移し母もろとも  
 のうてまづれぬうけの友ならむと云たり。ちゆきと悦ば  
 る帝妃の政而北條時宜は謁して幸ひけり。内宣亦  
 もろこひ録けうりをあはれい。世法士の弓馬の術を問ひ  
 じわりとまへず差裁のけうりを道通してゆき。これ  
 とがうと所を所をうに憶地をかつて出崩して宗室  
 桃の葉より取とえり至て今はさうられおくりとわく本  
 こころをむし。暫つあは休りひて俳徊も桃の林の一じつ















































雲のうして霞より見ゆまゝうきわひもあやふしむ乃ちまゝわくは  
 雲中もあやうしむれと云乃ち事とすまじく紅乃ちあや  
 紅乃ち秘法を秘法と云くも能く云ふて我れは権乃ちま  
 まの雲つひくやういふ人れ紅ら有るまじく衣冠と云く  
 あらねと人を紅しき法乃ち摩訶涅槃の功かよとのて智  
 珠の乃ち成を量乃ちをわくまじく紅らうの風雲に雲  
 々々々仙漢は紅らまじく紅らうの風雲に雲  
 かうして雲と云ふ海失る阿墨衆と云乃ち紅をまじり  
 紅らまじく紅らまじく紅らまじく紅らまじく紅らまじく